

機関番号：36301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2010

課題番号：21720153

研究課題名（和文） 文末形式の言語変化に関する日韓対照研究

研究課題名（英文） A Contrastive study on how Japanese and Korean sentence-final predicates change.

研究代表者

金 ジョンミン (KIM JOUNGMIN)

松山大学・人文学部・講師

研究者番号：30510044

研究成果の概要（和文）：本研究は言語類型論的に同じ膠着型言語に属し、形態・統語的に近似性を有する日本語と韓国語における文末表現の言語変化に着目し、その語用論的機能拡張と当該言語の文法体系に与える影響の度合いについて文法化、対照言語学、社会言語学など複合的な観点から考察を行い、両言語の類似点と相違点を明らかにすることを目的としたものである。

研究成果の概要（英文）：Both Japanese and Korean are classified in agglutinative language, and they share formal-syntactic similarities. This study focuses on the pragmatic functions of Japanese and Korean sentence-final predicates and aims to clarify how they differ from each other from the perspective of grammaticalization and contrastive linguistic approach.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総 計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：日本語，韓国語，文末形式，言語変化，対照研究

1. 研究開始当初の背景

日本語と韓国語のような SOV（主語，目的語，述語）の語順を持つ言語の特徴の一つに V の位置に現れる多様な文末表現がある。文末表現は話し手の様々な心的態度を表し、聞き手に対する伝え方を表すなど、談話の文脈を決める上で重要な役割を果たすことが知られており、これまで日本語の文末形式に関しては研究が盛んに行われてきた（寺村 1984，野田 1997，益岡 2007 など）。

一方で韓国語にも複数の文末形式が存在するが、その語用論的機能に関しては必ずしも十分に研究がなされてきたとは言いがたい。また、従来の日韓対照研究の先行研究では両言語の文末表現の対応、非対応関係について

の記述や指摘に留まっているものがほとんどであり、両言語の文末形式の言語変化に着目した対照研究もなされていないのが現状である。

このような状況の中で近年日本語の場合、(1)，(2) のような、かつてはあまり見られなかった日本語の文末表現の使用が顕著に見られており、言語変化のメカニズムの解明を目指す文法化の研究において関心が高まりつつある（Ohori 1995，Suzuki 1998）。

- (1) 「何言ってるの？」みたいな [ɸ].
 (2) あの人笑ってるし [ɸ].

*([ɸ]の表示は本来続くべき「名詞」または、「主節」が伴わないことを意味する

上記のような例文に対して考えた場合、従来の日本語文法に従うと「連体形」の後には名詞が伴われることが一般的であるが、最近(1)に示されるとおり、「みたいな」の後に名詞を伴わず連体形が単独で文を終止し、「自分(他人)の考えや発話を引用する」という意味に拡張される。

(2)の場合は、本来「～し」の後に続く主節は伴わず、従属節のみで文を終始しており、本来の「理由・羅列」の意味が薄くなる。

興味深いごとに韓国語の場合も日本語と同様、(3)のような文末表現に変化が見られる。

(3)Hakchang siceul-ey nocem-ul hay-ss-ta nun.

学生時代-に 路店-を する-過去-という

「学生時代に路店をしたという(現在連体形)」

(3)では「*tanun* (という)」という引用形式の「連体形」が文末に単独で出現し、本来の引用の機能とは異なる意味に拡張される。このような現象は「連体形」と「終止形」の区別が厳格な韓国語の文法において非常に特異であるが、従来の研究ではこのような現象はほとんど扱われていない。そのために、このような日韓両言語の**文末表現の言語変化に着目した対照研究**もなされていないのが現状である。よって、文脈決定に重要な意味をもつ文末形式の通時的な変化も含め体系的に分析を行う必要がある。

以上を経緯として申請者は**日本語の文末表現の言語変化**に焦点を当てて、同じ膠着言語型に属し、地理的にも文法的にも密接な関わりを持つ**韓国語のそれと対照**を行う本研究課題を構想した。

2. 研究の目的

本研究の究極的な目的は 談話の文脈を決定づける日本語と韓国語における文末表現の言語変化について、文法化、対照言語学、社会言語学的観点など複合的な手法を用いて分析を行い、両言語の類似点と相違点を明らかにすることである。

具体的には、(1) 日本語と韓国語それぞれの言語における文末表現にはどのようなものが存在し、特にかつては既存の言語体系に見られなかった新しい文末表現にはどのようなものがあるのか

(2) それらの文末表現がどのような過程で発生し、どのような語用論的機能を有するのかという挑戦課題を解明することを目指す。

3. 研究の方法

本研究課題を遂行するための具体的な研究方法は以下に示すとおりである。

(1) データベースからの用例収集：大規模コーパス (Sejong corpus, Kaist corpus)、日韓両言語の(対訳)小説、新聞、ドラマのシナリオデータなどのパラレルコーパス、Webを基盤とする言語データなど、様々なジャンルの談話資料から両言語の文末形式の用例を収集する。

(2) 社会言語学的手法による用例収集：日本語、韓国語の母語話者へのアンケート調査、対面調査の実施を通して、文末形式の用法についての母語話者の使用実態及び使用場面、容認性などを調べる。

(3) 収集したデータおよび調査結果を基に文法化、対照言語学、社会言語学的観点から両言語の文末形式の機能的類似点と相違点について分析を行う。

4. 研究成果

本研究のこれまでの成果の一部はすでに国内・国際学会において口頭発表を通して報告し、論文化を行った。

1 年目はこれまでの申請者の研究の延長線として日本語の文末形式「のだ」とそれに対応する韓国語の形式「**KES-ITA**」に関して分析を行った。

日本語の「のだ」に比べて韓国語の「**KES-ITA**」の研究の蓄積が少ないという現状を踏まえて、韓国語のコーパス (Sejong corpus, Kaist corpus) に基づいて用例を収集し、談話資料のジャンル(新聞、ラジオとテレビ談話、ドラマなど)による「**KES-ITA**」の変異形の現れ方、生起頻度を調査した。

その結果、新聞の記事においては変異形のバリエーションがほとんど見られないのに対して、ラジオとテレビ談話およびドラマの台詞においては「**KES**」系の変異形より、「**KE**」系の変異形の出現頻度が圧倒的に高いことを明確にし、この成果を「日本語学会 (第138 回大会)」における口頭発表の際に反映させた。

本研究はこれまでの韓国語の「**KES-ITA**」の研究が主に作例を用いて研究が行われていたことに対して、実際の客観的なデータを用いた分析が少なかった現状に対し、新聞記事、ラジオとテレビ番組の談話資料など、様々なジャンルのデータを用いた分析を行った点に新規性がある。

次に、日韓両国のドラマのシナリオデータを用いて、日本語と対照考察を行った結果、「のだ」の方が韓国語の「**KES-ITA**」に比べて、会話において特に生起頻度が高く、体現する意味範囲が広く、機能語としてより発達していることが分かった。この結果を「韓国日本連合学会 (第7回国際学術大会)」におい

て口頭発表を行った。

さらに、両形式について文法化における意味変化のメカニズムの知見を援用して、両者にて対比を行った結果、「のだ」は話し手のみならず、聞き手への指向性が高い文末形式として文法化が進んでいることを主張した。この成果として「韓国日本学会（第 80 回大会）」において発表し、論文文化を行った。

本研究は、両形式の相違点の記述に留まっていた先行研究に対して、理論的分析と考察を加えることにより、一般言語学における文法化研究への示唆を行った点、また、文法的に類似性の高い言語間においても言語変化の度合いにおいて微妙な差が存在することを明らかにした点で研究の意義がある。

さらに、この成果を参考に実際の学習者を教える教育現場において、韓国人日本語学習者の「のだ」文を指導する際にどのように指導したら効果的であるかという、教育的な観点から考察を加えて『言語学と日本語教育 6』に論文文化した。

具体的には、会話文において話し手の実情を聞き手に一方的に提示する場合(例: 実は私結婚しているんだ) や、前置き表現(例: お願ひがあるんですが...) において使われる「のだ」文の指導が特に肝要であるという間接的な教育的提言を行った。

2 年目には、本来は文中に置かれて後続名詞を修飾する「連体形」が文末の位置に単独で用いられる現象に着目した。その具体例として文末に生起する韓国語の「*tanun* (日本語の「という」に相当)」と日本語の「みたいな」を研究対象に对照分析を行った。

具体的には研究対象に一部の会話データとインターネットやブログに見られる記事に基づいて用例を収集し、用法の分類を行った後、両形式の語用論的機能拡張の度合いについて文法化の観点から对照分析を行った。

その結果、両形式は広い意味で「引用」の機能を果たし、連体形で文を終止する点では共通する。しかし、日本語の「みたいな」は「話し手(書き手)」または「聞き手」の考え、感情などの引用の機能のほかに、「話し手(書き手)」と「聞き手」の実際の発話、または、実際に発してはいないが、これから発するだろうと考えられる発話を推測して真似する用法がある。

これに対して、韓国語の「*tanun*」は「話し手(書き手)」の考え、感情や意志・決意を引用する機能に限られていることが分かった。この研究成果を韓国連合学会（第 8 回国際大会）および、日本で初めて試みられた「対照言語学若手の会のシンポジウム」において口頭発表を行った。

さらにこのこの点を Traugott(2003)によって提唱された主観化のメカニズムと関連付けて考察した。その結果、両形式は後続

名詞をあえて明記せず、連体形止めにすることによって、話し手の驚き、意外性などの様々な主観性(subjectivity)を表すという点では共通する。ただし、韓国語の「*tanun*」は主に近年急速に発達しているインターネットや web を基盤とする「書き言葉」において主に主観化が起こっているのに対して、日本語の「みたいな」は書き言葉だけでなく話し言葉においても生産的に用いられているという相違が見られることを明らかにした。この点についての研究結果を『歴史語用論入門』という言語学概論書籍に執筆した。

本研究を通して、同じ SOV の語順を持つ日韓両言語において、文末の位置が話し手の様々な主観性を反映するのにいかに重要な位置であるかが示唆された。また、これまでの日韓対照言語学分野においてあまり注目されてこなかった、従来の文法体系に存在しなかった言語現象の出現に着目し、さらに両言語の対照分析を行った点に本研究の独自性がある。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）

□ 金 廷珉（査読中）「連体形止め」の引用表現に関する日韓対照研究『日本学報』, 第 88 号, 韓国日本学会.

②堀江 薫・金 廷珉 (2011) 「日韓語の文末表現に見る語用論的意味変化 —機能主義的類型論の観点から—」, 『歴史語用論入門』高田博行・椎名美智・小野寺典子(編), pp.193-207, 大修館書店, 査読有.

③金 廷珉・堀江 薫 (2010) 「「のだ」構文の談話機能に関する対照言語的考察—韓国語の「KES-ITA」との対比を通じて—」『言語学と日本語教育 6』南雅彦(編), くろしお出版, pp.175-190, 査読有.

④金 廷珉 (2010) 「文法化理論を応用した日韓語の文末形式に関する対照研究—「のだ」と「것이다」の意味変化の対比を中心に—」『日本学報』第 84 号, 韓国日本学会, pp.153-164, 査読有.

〔学会発表〕（計 4 件）

①金 廷珉 「韓国語の・*tanun* 構文の文末機能：日本語との対照を通して」, 「対照言語学若手の会」シンポジウム, 於 麗澤大学, 2010 年 7 月 17 日.

②金 廷珉 「連体形止め」の引用表現に関する日韓対照研究『韓国日本連合学会第 8 回国際学術大会発表論文集』韓国日本連合学会, pp.105-111, 2010 年 7 月 2 日, 於南ソウル大学.

- ③金 廷珉 (2009)「日本語の「のだ」と韓国語の「것이다」に関する対照分析 ―ドラマのシナリオデータを用いて― 『韓国日本連合学会第7回学術大会及び国際Symposium』韓国日本連合学会, pp.137-143, 2009年7月3日, 於韓国・群山大学.
- ④金 廷珉「「のだ」と「KES-ITA」の談話機能の対比」『日本言語学会第138回大会予稿集』日本言語学会, pp.112-117, 2009年6月20日, 於神田外国語大学.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金 ジョンミン (キム ジョンミン)
松山大学・人文学部・講師
研究者番号: 30510044